

知恩院の七不思議



世の中にはとても説明できない、理解できない現象や奇異な言い伝えがあります。日本では古くからそれらを7つにまとめる慣わしがあり、それを“七不思議”と呼んできました。京都にも七不思議の逸話や伝説が数多あります。その中の一つが“知恩院の七不思議”です。





その1 鶯張りの廊下—仏の誓い

知恩院の建物で御影堂、集会堂、大方丈、少方丈を結ぶ廊下は全長550mに及びます。歩くと鶯の鳴き声に似た音が出て、静かに歩こうとするほど音が出るので「忍び返し」ともいわれ、不審者の侵入を知るための一種の警報装置の役割を担っているといわれます。また鶯の鳴き声が「法（ホー）聞けよ（ケキョ）」とも聞こえることから、不思議な仏様の法を聞く思いがするとも言われています。



その2 白木の棺一府惜身命

三門楼上に二つの白木棺が安置され上には將軍家より三門造營の命をうけた造營奉行五味金右衛門夫妻の自作の木像が置かれています。金右衛門は立派なものを造ることを心に決め自分たちの像をきざみ、命がけで山門を造りました。やがて三門が完成しましたが、工事の予算が超過し、夫婦はその責任をとって自刃したと伝えられています。この夫婦の菩提を弔うため白木の棺が三門楼上に置かれ、見る人の涙を誘います。



その3 忘れ傘一知恩 報恩

御影堂正面の軒裏には骨ばかりとなった傘が見えます。当時の名工左甚五郎が魔除けのために置いていったという説と、知恩院第3世雄誉巖上人が御影堂を建立するとき、このあたりに住んでいた白狐が、自分の棲居がなくなるので上人に新しいのをつくってほしいと依頼し、それが出来たお礼にこの傘を置いて知恩院を守ることを約束したという説とが伝えられています。いずれにしても傘は雨が降るときにさすもので、水と関係があるので火災から守るものとして今も信じられています。



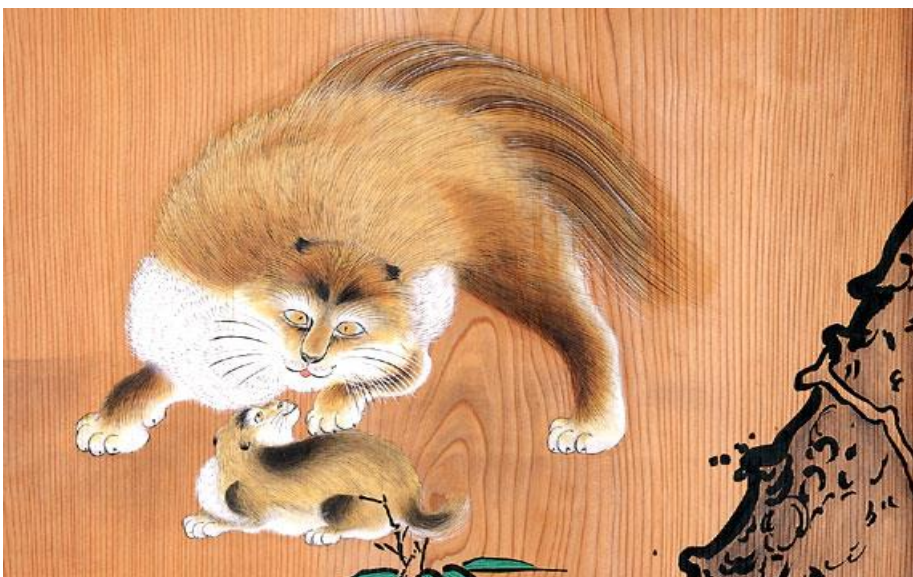
その4 抜け雀一心をみがく

大方丈の菊の間の襖絵は狩野信政が描いたものです。紅白の菊の上に数羽の雀が描かれていたのですが、あまり上手に描かれたので雀が生命を受けて飛び去ったと言われています。現存する大方丈の襖絵には、飛び去った跡しか残っていませんが、狩野信政の絵の巧みさを表した話といえるでしょう。



その5 三方正面真向きの猫一親のころ

方丈の廊下にある杉戸に描かれた狩野信政の猫の絵で、どちらから見ても見る人の方を正面からにらんでいるので、この名があります。親猫が子猫を愛しむ姿が見事に表現されており、親が子を思う心、つまり、わたしたちをいつでもどこでも見守ってくださっている仏様の慈悲をあらわしています。



その6 大杓子一仏のすくい

大方丈入り口の廊下の梁に置かれている大きな杓子で、大きさは長さ2.5メートル重さ30キログラム。こんな大きな杓子はあまり見かけないので、より珍しく思われます。伝説によると三好青海入道が大坂夏の陣のときに大杓子をもって暴れまわったとか。兵士のご飯を「すくい」振舞ったということです。

「すくう」: すべての人々を救いとるといふ、いわれから知恩院に置かれ、阿弥陀様の慈悲の深さをあらわしています。



その7 瓜生石一はげみ

黒門への登り口の路上にある大きな石は、知恩院が建立される前からあるといわれ周囲に石柵をめぐらしてあります。この石には誰も植えた覚えがないのに瓜のつるが伸び、花が咲いて瓜があおあおと実ったという説と、八坂神社の中頭天王が瓜生山に降臨し、のち再びこの石に来現し一夜のうちに瓜が生え実ったという説が伝えられています。また、石の場所を掘ってゆくと二条城までつづく抜け道がある、隕石が落ちた場所であるなど、様々な話が言い伝えられている不思議な石であります。



{知恩院}

知恩院（ちおんいん）は浄土宗の総本山の寺院。山号は華頂山（かちょうざん）。法然上人像（御影堂）および阿弥陀如来像。開山は法然である。正式呼称は華頂山知恩教院大谷寺（かちょうざんちおんきょういんおおたにでら）浄土宗の宗祖、法然が後半生を過ごし、没したゆかりの地に建てられた寺院で、現在のような大規模な伽藍が建立されたのは江戸時代以降である。



